

まちなか企画展「くしろの文様」を終えて

澤田 恭平*

「くしろの文様」について

釧路市立博物館では、2021年7月28日(水)から8月31日(火)までの約1か月間、釧路フィッシャーマンズワーフMOO1階、釧路市民活動センターわっと、釧路市こども遊学館、港文館の4施設の一角をお借りして、まちなか企画展「くしろの文様」を開催いたしました。2013年の「くしろのじょうもん」から数えて9回目となった今回の展示では、市内の遺跡から出土した縄文から擦文までの土器の文様に焦点をあてました。

縄文文化については、7月27日に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産への登録が決定されたこともあり、世間的にも関心が高まりつつある状況です。「縄文遺跡群」における北海道の主体は渡島半島ではありますが、釧路でも関連性が窺える資料が出土しています。ここでは、今回の企画展の概要について改めて紹介するとともに、展示で収まらなかった話についてもふれたいと思います。

フィッシャーマンズワーフMOO1階①



特別？ブランド品？亀ヶ岡式土器

今から約3,500～2,500年ほど前にあたる縄文文化の終わり頃、道南や東北地方では亀ヶ岡文化と呼ばれる土器文化が発展します。立体的な文様が描かれる亀ヶ岡式土器ですが、実はとても良く似た土器が釧路市内の遺跡からもみつかっています。

本来、釧路ではみられない土器が出土する理由として、ひとやものの移動といった視点から様々な可能性が考えられています。移動ルートや手段についてはいまだに謎にみちていますが、いずれにせよ亀ヶ岡文化の影響は、長い旅路の果てにこの地へとたどり着いたのでしょう。

大昔の釧路のひとたちにとって、山の向こう海の向こうの文化は、果たしてどのように映っていたのでしょうか…？



写真、図1 ①の展示風景と解説パネル

①では幣舞遺跡から出土した亀ヶ岡式土器や続縄文の土器を展示し、文様やそのデザインについて紹介しました。

*釧路市立博物館

亀ヶ岡文化の影響を受けたものは道東でもみつかっています。かつて緑ヶ岡遺跡などで出土した亀ヶ岡式土器について、澤四郎らは「搬入品」と考えました。その後、幣舞遺跡の発掘調査で亀ヶ岡式土器の追加資料が出土したほか、東北の弥生文化にみられる土器とよく似たものもみつかっています。これらの資料は、釧路と道南・東北との関連性を考える上で良好な資料となっています。

釧路市民活動センターわっと②



なんだかよく分からないすごい土器の文様を真似てみた

縄文の終わり頃、釧路では地元の土器に混じって亀ヶ岡式土器にとっても良く似た土器がみられるようになります。一時的ではありますが釧路「らしい」土器と「らしくない」土器が同時にみられる状況になるのです。その後、釧路ではこの大型壺のように亀ヶ岡式土器の文様を真似たような文様が目立つようになります。当時の人も、よく分からないけどすごい文様をなんとか「モノ」にしようと切磋琢磨していたのでしょうか？

【勝手に命名。土器・コミュニケーション】

土器に描かれる文様は、地域ごとにどこか似た印象を受けるものが多いです。想像の域は出ませんが、きっと土器をつくる際は、井戸端会議のように「あでもない、こうでもない」と和気あいあいとしながら隣の人の文様をのぞき見て描いたのでしょう。

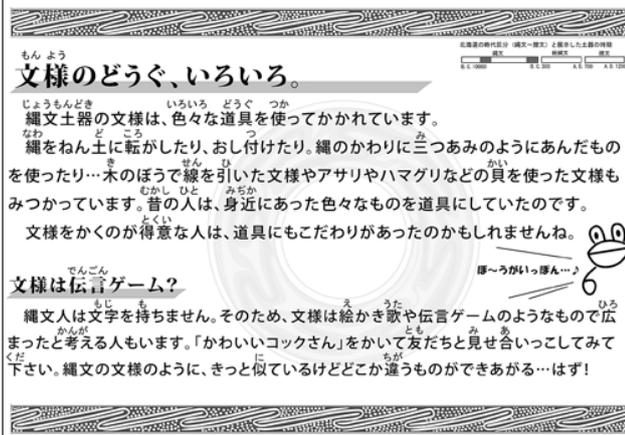
上手くできた土器は、お隣のムラへ自慢しに行って、その場で肉や魚と交換、みたいな出来事があったのかもしれませんが。

写真、図2 ②の展示風景と解説パネル

②では、過去の館報で紹介された大型の壺を展示しまし

た(澤1958)。この土器は、昭和33年5月の公民館建設工事(現釧路市生涯学習センター付近)中に出土したものです。澤四郎はこの土器を「縄文晩期大洞A式乃至は同式直後の時期に比定され得るもの」と考えています。発掘調査資料がまだ少なかった昭和30年代前半、亀ヶ岡式土器とほぼ同時期に存在していた地元の土器群について、澤は既にその実態を掴んでいたのでしょう。今回展示したこの土器の詳細については今後の当館紀要などで改めて紹介したいと考えています。

釧路市子ども遊学館③



写真、図3 ③の展示風景と解説パネル

③では、桜ヶ岡2遺跡出土の縄文早期の土器(写真奥左)と幣舞遺跡出土の縄文晩期の土器を展示し(写真奥右)、土器の文様の描き方に焦点をあてました。日本の先史文化は、その多くが土器文化です。土器の文様やその描き方を考えることは、当時の人がどのような道具を使っていたかといった技術的なことから、文化の在り方やその波及に至るまでの幅広い研究にもつながります。

後日、絵描き唄を用いた文様の地域的な広がりについて

博物館実習で話をしたのですが、実習生の多くが「かわいいコックさん」を知らないという事実が明らかとなりました。土器の文様の移り変わりもこのような文化・時代のトレンドの中にあっただのかもしれない。

港文館④



文様、その後

擦文土器をみると、先が鋭い道具で刻んだような細かな線を用いて文様が描かれています。その形は縄文土器と比べてどこかシンプルです。

諸説ありますが、土器の文様は、時代が新しくなるにつれて次第に単純化していく傾向にあります。時期や地域の違いはありますが、創意工夫がこらされた縄文土器のような「デザイン」から記号や符号のような「マーク」へと変化していくのです。

…そもそも昔の人はなぜ土器に文様を描いたのでしょうか。キレイな文様の土器は物々交換のいい材料になったのかもしれませんが。カッコいい文様の描き手は周りから尊敬されていたのかもしれませんが。土器の文様をじっくり観察し、そんな当時の様子を想像することも土器の文様の楽しみ方のひとつなのです。

写真、図4 ④の展示風景と解説パネル

④では幣舞2遺跡で出土した擦文土器の高杯を展示しました。埋蔵文化財調査センターに収蔵されている擦文土器の文様をみると、雑把に描かれたものや帳尻を合わせようとしたものなど、単純化の中にも擦文人の「人間くささ」を垣間見ることができるものもあります。

展示を終えて

今回、釧路の考古をより身近に感じてほしいという意図もあって、文様やそのデザインを題材のひとつとして展示しました。釧路には魅力あふれる考古の遺物がたくさんあります。今後とも地元の考古の面白さを伝えるべく、調査・研究を行っていきたくと考えております。

最後に、来場された皆様や場所を提供して頂いた各施設の関係者の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。